

# 国際ICT利用研究学会 研究会研究論文誌

Transactions of the IIARS

# 1.2

2018年 第1・2合併号  
September 2018 Vol.1 No.1・2

## 研究会論文誌発刊に寄せて

国際 ICT 利用研究学会

副会長 上山俊幸 (千葉商科大学 教授)

早いもので、国際 ICT 利用研究学会が設立されて3年目を迎えます。この間、本学会はさまざまな活動を行って参りました。また、学会長の強力なリーダーシップによって、学会の持つべき本来の機能を実現するために研究活動を加速させています。

そのひとつの成果として、今回、国際 ICT 利用研究学会研究会研究論文誌第1・2合併号(プリント版)を発行する運びになりました。



投稿されたかた、ならびに査読・編集等にご協力いただいた会員の方々にお礼申し上げます。

さて、平成30年版科学技術白書によると、「平成19年から平成29年の10年間で、大学等と企業の研究者数が増加している」としながらも、「若手研究者数の伸び悩みによる研究力の低下が生じる中、・・・、卓越した知を持続的に創出していくことが必要である」と危機感を募らせ、「次代を担う研究者の確保、若手研究者のキャリアパス形成、経済的負担に対する不安の解消が必要である」と述べています。科学技術立国を目指し、若手研究者数を増加させていくためには、どのような要因が効くのか分析して確かめてはいませんが、国の政策とそれを表現した予算、税制、あるいは短期的には管理できない人口や労働者人口、進学率など様々な要因が考えられるだろうと思います。

本学会が存続発展することによって、研究者が研究成果を発表する機会を増やし広い意味での研究環境を整えるという役割を果たすことを通して、若手研究者数が増えていくことに貢献できるものと考えております。

今後も会員各位には研究成果を発表していただき、若手研究者に魅力ある学会を目指していければよいと考えておりますので、会員各位のさらなるご協力を賜りたくお願いする次第です。

これからも国際 ICT 利用研究学会研究会研究論文誌の発行が継続されますよう、投稿をお願いいたします。

# 目次

## 巻頭言

研究会研究論文誌の発刊に寄せて

国際 ICT 利用研究学会 副会長 上山 俊幸 . . . . . 1

## 研究ノート

オイラーの  $\phi$  関数に関するレーマーの予想と Xiao の証明について

鈴木 治郎 (信州大学) . . . . . 2

## 論文

長野県は長寿県か? — 生命表から見る長寿県 —

鈴木 治郎 (信州大学) . . . . . 6

観光振興資源発掘を目的としたアプリケーションの開発

佐久間 貴士 (高崎商科大学) . . . . . 10

深層学習による空中写真を対象とした土地被覆分類の試み

今井 優 (立正大学) . . . . . 16

## 第 1 号 要旨

22

## 編集後記

## 編集後記

この1年、教職課程再課程認可（「教育職員免許法施行規則及び免許状更新講習規則の一部を改正する省令（平成29年文部科学省令第41号）」2017年11月17日公布）の作業に追われた。簡単にいえば、再課程認可とは、戦後はじめての日本の大学教育における教職課程の大幅な見直しで、現在、教員免許取得可能な教職課程を設置する全ての大学は、この申請手続きを経て、2019年から新課程に移行する。審査の結果は、19年以降の教職課程の存続そのものを左右する。

これまでも教職科目を担当する者は、その都度、文科省の教員審査を受けてきた。たとえば、〇〇科指導法（教科指導法）を担当予定の教員は、その科目を教えるに該当する研究業績があるかが審査され、「A科目は担当可能だが、B科目は研究業績不足のため不可、教えることはできない」などの結果を得てきた。ところが、今回の再課程認可は、各教員の審査に加え、担当科目のシラバスの内容の確認、文科省が示すガイドラインに沿った指導内容の実施の有無までが問われる非常に厳しいものである。ちなみに、文科省の教員審査は新学部設置と教職科目のみで、そもそも審査を受けたことのない大学教員の方が多くははずである。

この業務に伴い、改めて教職科目担当の全教員の業績書を確認する作業に追われた。担当科目とのミスマッチや、テーマの違い、論文や研究数に問題のある教員も少なくないためだ。研究者・教員の業績書は、まさにその人の「トリセツ」的な部分があり、学会・研究会での発表、テーマや論文の詳細、共同研究者の名前まで事細かく記載されている。若手は若手ゆえの問題—研究以外の業務の多さ、資金、研究できる環境の有無などに起因する業績の乏しさが著しい。一方で、熟練研究者は過去の華々しい研究に比べて、近々の新しいトピックスに疎く、論文のテーマや概要説明の巧みさが目立つ。まさに資金獲得等で申請書を書き続けた「成果」の結果とも見えなくない。奇しくも上山副会長が巻頭言で指摘された、研究力そのものにもつながるものだろう。

近年、論文投稿料を当てとするビジネス、いわゆるハゲタカジャーナルへの投稿なども問題視され、研究の「量」のみならず「質」やモラルが改めて問われている。となると、業績書に示される研究キャリアからは、その者の研究に対する姿勢や態度も読み取れることになる。

本研究会は幅広いテーマをICTというキーワードでつなぎ、さまざまなジャンルで活躍できる実力を有する研究者を「育てる」ことを目的に掲げている。熟練した研究者が研究会を通して若手をサポートし、逆に熟練研究者は若手から最新の研究動向や興味関心について学び、世代間の知見を埋め、視野を広め、質の良い研究を真摯に行う。その相互作用が多くの人の手を経て、さらに深められることを本研究会の論文誌をはじめとする成果に期待したい。

国際ICT利用研究学会 理事

平成国際大学 スポーツ健康学部 教授 青木 智子

国際ICT利用研究学会研究会研究論文誌 第1巻 第1・2合併号

Transactions of the IIARS Vol.1 No.1・2

2018年9月30日 発行

発行者 国際ICT利用研究学会研究会研究論文誌編集委員長 山下倫範

表紙デザイン 内藤慶恵

印刷 株式会社カンファレンスサービス

問合せ先 office@iiiar.org